フンシンガー（ふんしん泉）

～市立博物館所蔵の写真より～

市立博物館では、宜野湾（村）市に関する資料を後世へ伝えることを目的に、市民の皆さまが字誌の編纂（さん）や展示などに活用できるよう、フィルムや写真をデジタル化し、データベースの作成を進めています。今回は、市立博物館が所蔵する写真データの中から、伊佐の「フンシンガー（ふんしん泉）」を紹介します。

伊佐には、ウフガー（大泉）、ウブガー（産泉）、フンシンガーという三つの泉がありました。

▲クンチンガーとも呼ばれ、水の湧き水によって「イモ、ヤサイ、洗場」「浴場男川」にわかれています。1953（昭和28）年に改修工事が行われました。

ウフガー（大泉）、ウブガー（産泉）は残念ながら、去る大戦で米軍の道路建設により無残にも埋められ跡形もなくなり、現在の国道58号の真下に埋もれてしまいました。元の姿はなくなりましたが、水源を伊佐区の3班に移して改修されています。

フンシンガーは戦前、人里離れたところにあり、10世帯ほどが利用していました。大雨の日にも濁らない清水がこんこんと湧き出ていました。

左下の写真は、フンシンガーで泳ぐ子どもたちです。生活用水に利用されるだけでなく、子どもにとっても憩いの場だったことがわかります。

湧き水から出る水を活用して「ふんしん・せせらぎ通り」が整備され、1992（平成4）年には国土交通大臣から手づくり郷土賞を受賞しました。フンシンガーの豊かな水は、現在も人びとに豊かな恵みをもたらしています。

（比嘉三紀子）

【問い合わせ】市立博物館☎870－9317

▲フンシンガーで水遊びする子ども達。1970（昭和45）年頃

地域の遺跡〔普天間〕

今回は、一六七一年にできた宜野湾間切よりも古くから存在していた普天間地域の遺跡を紹介したいと思います。

約三五〇年前、琉球王府は当時の浦添間切から一〇箇村、中城間切から二箇村、北谷間切から一箇村を分離し、新たに真志喜村を設けた一四箇村で宜野湾間切を新設しました。この一四箇村に含まれる普天間村は中城間切から分離されたことから、宜野湾間切新設以前から人々の生活が営まれていたことが分かります。

では、普天間地域にはいつ頃から人々が暮らしていたのでしょうか。その疑問を解くためのヒントが遺跡にはあります。普天間地域には複数の遺跡が確認されていますが、その中でも主な遺跡を見てみましょう。

普天間地域の北側に位置するキャンプ・瑞慶覧内の海軍病院周辺に普天間後原（クシバル）第二遺跡や普天間下原（シチャバル）第二遺跡といった縄文時代晩期頃（約二五〇〇年前）の遺跡が把握されています。両遺跡とも竪穴状の掘り込みが確認されており、当時の建物跡の可能性が考えられます。また、そのほかにも多くの土器などが見つかっていることから、両遺跡が当時の集落であったことが予想されます。

今回は二つの遺跡を紹介しましたが、普天間地域にはグスク時代（約九〇〇年前）や近世（江戸時代頃）以降の遺跡も確認されています。これらの遺跡は当時の人々が普天間地域で暮らしていた重要な証拠であり、その遺跡を調べることで昔の人々の活動を知ることができます。

文化課では、地域の大切な文化財を将来に伝えていくために、引き続き把握した情報を公開し、市民の皆さんと「文化財を活かしたまちづくり」ができればと考えています。

【問い合わせ】文化課☎893－4430

▲土器が出土する様子（普天間下原第二遺跡）

※市報ぎのわん6月号では、「女男ゆんたくひろば」を掲載します。